

三 機具の沿革

機具の沿革は明治十年ボタン機の始めて福井に來たり同年東別院に開設したる共進會に陳列運轉したる時を以て起源とせざる可からず其以前に於ても多少改良なきに非ざりしと雖別に著しき者を見ず而して同共進會にボタン機を以て製織したる織物は場内狭く縦覧人多きが為め塵埃甚しく自ら之を織込みたると機具の不完全と織工の不熟練なるが為に製品粗惡にして好評を得ざりしが爾來福井織工會社に於てボタン機を据付け傘地ハンカチーフ類を織立てたるが兎角織工合惡しく或はボタン機を便なりとし或は舊來の大和機を良しとせり今其壹例を示さんか明治廿年の頃上州の人星野傳七郎なるもの加州小松より福井に來たり大にボタン機具の不完全を唱へ大和機の便を主張す然れとも星野の主張する機具は價格高貴なるを免れざるを以て遂に従來の機具を使用することとせり而して其今日使用する如きボタン機に至るまでには種々の改良ありしと雖も其著しき改良と稱すべき者は葛巻包喬の考案に基き機具製造の舊家長谷川與三兵衛の手によつて改良せられたる者にして一はボタン機のフクマキに装置したる巻取車を除きたるとチマキの下に垂れたる重錘に代わる齒車を以てしたるにありと云う而して此改良を為したるは傘地の時代にして其年月明らかならず

困に曰くボタン機の始めて日本に輸入したるは明治四年京都の織殿が佛國より取寄せたるを以て嚆矢と為す者ありと雖も其實は決して然らず福井藩に於て藩主春岳家臣佐々木權六をして佛國よりボタン機二臺を取寄せ福井市舊御製造場に是を据付け運轉を試みたれとも固より銃砲とは其構造を全く異にする者なるを以て運轉自由ならず果は場隅に放置して顧みる者なく廢藩置縣の際是を他の機械と共に賣却せりと云う以上は故酒井功が明治十年京都に到りボタン機を購求せんとなしたる時偶々友人某より開き直ちに舊藩主邸に到り何人に賣却したるやを調べたれども程經しことにて更に所在明らかならざりしと云う

現今用る所の管巻は元來桐生の産にして明治廿一年頃加州小松町機業家新田甚三右衛門の工場にありしを福井市の機具師長谷川與三兵衛行て之を實見し種々の工夫を加へて完成するに至りし者なりと云現今使用する所の整經機も亦同人の工夫に出る者なるが明治廿五年頃川俣の入管野廣蔵より長谷川に贈るに同地に行はるゝ整經器の雛形を以てす同人之に種々の改良を施し多數の枠を整經するの装置を為せりと云う明治三十四年福井縣機具製造同業組合を組織し現に長谷川與三兵衛之が組長たり會員は參拾貳名なりと云ふ現今使用するゼソマイ即ち絲繰器械は全く長谷川與三兵衛の研究發明に出づる者にして明治三十一年本縣知事は銀盃壹個を贈與して同人の功勞を賞せり今同絲繰器械發明に就て同人の縣廳に出したる履歷書を得たれば左に全文を載せん

絲繰器械改良に係る沿革書 長谷川與三兵衛

我家は往昔より大工職なる處百十餘年前寛政年間祖父與三兵衛大工の傍奉書紬豎絲撚掛に用ゆる臺本錘撚車の製造を營みたりしが手数を省かん為め工夫を凝らし四本立より八拾本立迄大車に改良し當時乏を便益とし福井市中機業家に於て悉皆之れを使用し其製造は皆我家の製造に係り其後文政年間七十年以前よりは父與三兵衛此の業を継ぎ同様の撚車は勿論其他器具を始め經臺立等奉書紬職に関する壹切の器具を製造せり其當時は福井市中に於て同様の機具を製造する者は我家の外元松本横町指物屋職にて一戸あるのみ其後安政年間四十年前に於て父與三兵衛大車錘數八本立に為し車輪を大にし直徑四尺五寸に改良したるに大いに便利の功を奏し該器械は我家專業になれり私儀に於ては幼少より父の事業を輔作し明治五年父與三兵衛没したる後愈此途の發達を謀らんが為め専心機具器械改良に熱心致居候處明治十年石川縣金澤臨時博物開館に際するを以て同年四月中金澤へ出張し同地に在る製絲場撚絲場を巡視し大に感ずる處あつて歸福し爾來益機具の改良に研究致居候處明治十二年に至り福井市中に於ても矢毛町織工會社三ッ橋三宅丞四郎土居の内淡島十兵衛の三ヶ所に於てほ京都其他より取寄せたる纏場十二窓の羽車四枚附の絲繰器械備置たるも敢て其用を為さず其内織工會社の壹臺を佐佳枝下町水野勇次郎に借入同人に於て又々之を試用せしに繰絲に夥多の絶斷を生じ便利の器械ならざるの旨を以て之れが改良方を與三兵衛に同人より示談せり依て實見するにアガキの少量なると器械全体の不釣合なるにより効を為さざることを發覺仕候に付種々研究の末アガキの目ハジキ分量を三ヶに減じ全体の釣合を矯め改造したる處絶斷の憂を免かれし稍効を奏するに至りと雖も素々分銅重りに依り運轉を為す器械なれば分銅重り繩を巻締むる時は運轉を中止するものにて幾許の時分を空費する而已ならず運轉休止の際繰絲に絶斷を生じ極めて完全の便器ならざるに付之れが改良に日夜辛苦を為し漸く二枚の齒車を増し都合六枚と為して分銅繩を巻締むる時と雖も中止せざる事を按出して之れに改良せしに極めて便利のものとなれり(其故は從來の分は羽車四枚にして分銅繩巻締の時はハジキにより四枚共遊ばしむるの仕掛なる處齒車數二枚増し六枚と為し分銅繩解舒の時は齒車四枚に依り又巻締めの時は四枚を遊ばしめハジキを以て他の二枚に依り働きを為さしむ)然れども當時より二ヶ年間は僅數の機業家に漸く年分五六臺を製造するに止まれり然るに明治十四年三月に至り三宅丞四郎より絲繰器械既に使用を為すに至りたるも綾繩掛の點は空氣の乾燥により緩急を生ずると又枠の各個に対し緩急の差違ありて不便あるのみならず一個の枠を止むるに於ても總体の枠を休止せしむる事ありて不完全なるに付之れが改良を図らんことを同人より委託あり依て是亦研究を遂げ之れを摺らし車に改造せん為め雛形を造り毛矢町酒井功氏に協議を遂げ試験をなしたるに大に便利なるに付將來之れに改造せり此改造器械は三宅丞四郎に調進したるを以て福井市中の嚆矢とす

翌明治十五年に於て當時本縣農商課員池村金良氏此器械の便利なるを以て專賣特許出願の事を薦められしも既に數臺を發賣したる後なるを以て出願せず夫より年を追

って機業家の増殖するに随ひ年々製造高を増したる處明治廿年に上州より高力直寛なる入福井に來たり羽二重織を教授したるより機業家皆該事業に轉じ絹織物一層隆盛に赴きたるも同年秋に於て加州小松にて上州人星野傳七郎縮緬織及羽二重織の事業を教授致居る趣を傳聞したるに依り尚機具等改良上研究を遂げんが為め同地に出張し新田甚左衛門に就き取調を為したる處大に得る所あり歸福す其後大和機具バックン機具との優劣を争い一時紛擾なしたる事もありしが其折柄小川喜三郎氏外十名の有志家一の會社を以て江戸上町に機業伝習所を創立せらるゝに當り同所の機具器械は製造方を悉皆與三兵衛に委託されたり亦是より以來羽二重事業大に隆盛に伴い漸次原絲は細物を使用するに至れり然るに茲に用ゆる絲繰器械は纏場の重量なるより太絲こそ左程の關係を有せざるも細絲に至りては絶斷の憂あつて大いに不便を感じ依て之れを輕量に改良せしに全く利便有益の器械になりたると年一年に機業家の増殖せしにより本縣下に於ては益需要の數を増し毎年製出高を増加するに従ひ福井市に止まらず本縣下各他に同業著を生ずるに至り其數尠なからずと雖何も我發明したる改良の器械に倣ひ製造上多少の功拙ありと雖總て同一の器械に非ざるはなし我家の製造高に於ては去る明治廿五年を以て三百廿餘臺を製造し比年中の最多額とす尚廿二年以來他縣下に販出したるものは武州入間郡田島與吉を始めとし三重愛知鳥取島根富山石川新潟山梨の諸縣へ數臺を搬出せり右は畢竟機業隆盛の結果に依ると雖も亦以て與三兵衛祖先よりの事業を継ぎ器械改良に専心刻苦して漸く絲繰器機を改造し現今機業家一般をして必要の具となさしめたる功に外ならず侯而して尚將來益々有望なる國産振起の為日夜熱心研究致居候次第に御座候

四 附屬器の沿革

福井市に於て箴製造業者として最も古き者は京都の人福井文太郎（茶屋）なり今同人の履歷を略記せん明治十三年京都の吉村岳翁に就き箴製造業を傳習し十六年一月京都府に開業す十九年福井織工會社社員富田循良三宅丞四郎等の懇望により同業者吉村岳翁小島鶴太郎磯見吉次郎河合直次郎の四名と計り二十年五月福井市に開業せり然るに吉村岳翁等羽二重の前途有望ならずと誤認し歸京す同人は河合直次郎と共に踏止まって其業を継続す二十三年第三回内國勸業博覽會に出品し有功三等賞を賜ふ當時福井より出品したる箴師十數名ありしも斯の如く名譽を得たる者同人のみなりしと云ふ廿五年八月同人没し福井與三次其業を継ぐ

福井人にして箴師として有名なる者は加藤常三郎なり同人は明治廿年織物組合員富田知剛同人を伴ひ石川縣小松町に至り織物場を觀察し同場數師星野傳七郎に依り羽二重の製造法を尋ね傍ら桐生箴を輸入するの手續きを成す明治廿五年箴業組合を設立し藤木虎吉是が組長たり組合員一ヶ年の産額貳萬四五千円りとな云う

杼の改良に就て功勞ある者は玉村仙松なりとす同人は維新前藩主の鉄砲鍛冶にして鉄工に巧みなり後木工に従事す福井絹織物の稍盛なるに至るや同人は専ら杼の改良を図る從來奉書紬に使用したる杼は極めて單純粗雜なるものにして到底傘地羽二重

に適するものに非ず故に當時は多く京都桐生地方より輸入したる者なるが同人は百方辛苦の末完全なる杼を工夫せり今日一般に使用する所の杼は多く同人の工夫に出る者なりと云うなれば従來博覽會共進會に出品して銅牌褒章を得たること八回の多きに至る機業の旺盛に伴ふて杼器製作者の數日々に其數を加ふるを以て同人は百方斡旋尽力する處あり遂に杼業組合を設立し自ら進んで其事務を担当す時に明治三十年四月なりき爾來銳意専心事務を處理し組合の組織を改良す卅四年三月同人の組長を辞するや組合は其勞に酬ひんが為に銀盃一個を贈る今日の組長松村虎松又斯業に功勞少ならずと云う現今杼業組合の組合員は二十一名にして其一ヶ年の製産額壹萬五六千圓なりと

綜統は元來絹絲を以て製したる者なるが其價格の高貴なるのみならず品買脆弱にして甚だ不經濟なるを以て明治廿二年三宅丞四郎カタン絲を以て絹絲に代用することを發明せり而して當時は未だ奉書紬の如く二枚綜統を用いたる者なるが今日の如く四枚綜統を用いるに至りたるは当市毛矢町の綜統師倉内兵吉の工夫に出つと云う全体綜統なるものは織物業に最も重要なる者にして其地合柄合は綜統の力に依る者多し然れとも従來の習慣にて綜統は多く寡婦小娘の内職にて小機業家の如きは自家にて是を製造す故に綜統業には未だ組合なる者なく従つて改良の沿革を知るに由なし然れども前記倉内兵吉の如きは従來綜統の専門業者なるを以て發明する所少からず特に古綜統の掛直し及び洗濯の如しも同人の工夫に出ると云う同人の製品は大日本染織競技會及び全國製産品博覽會に於て何れも褒状を得たり

羽二重機業の功勞により緑綬褒章を賜りたる者は当市の生絲商小川喜三郎一人にして明治卅二年本縣第一回重要物産共進會の際本縣知事より銀盃を賜わたる者は左の三人なりとす

福井市毛矢町	永田 重
全 春山中町	長谷川與三兵衛
全 簸川中町	村野 文次郎

又生前の功勞により同荒川本縣知事より金五圓追賞せられたる者左の如し

福井市照手下町	三宅 丞四郎
全 毛矢町	福井 文太郎
全 手寄下町	渡邊 清七